



TITLE:

対話という方法:ひとりごとの覚え
がき

AUTHOR(S):

渦原, ゆい

CITATION:

渦原, ゆい. 対話という方法:ひとりごとの覚えがき. 臨床教育人間学
2004, 6: 79-89

ISSUE DATE:

2004-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197006>

RIGHT:

対話という方法 —— ひとりごとの覚えがき ——

渦 原 ゆ い

老師曰く「およそ、研究とは自己との関わりなくしてありえない。」
 態々、大学という世界に再編入した時点から一つの点だけを見てきたと思う。
 老師曰く「史的に私的にそして詩的にその研究対象と向き合いなさい。」
 それでは、その過程を「対話」と呼ぼう。

「編入」で入るということは、それなりの理由があった。それなりの理由をカギカッコで括ってみてもどうしてもはみ出てしまう。まるで毛布をかぶってもかぶってもはみだしてしまふ足のようなものだった。その足のようなシッポを切り落とそうとしたら海が荒れてきた。既存の研究領域では誰かを「裏切る」ような気がした感は拭えなかった。

一つのことだけを抱きつづけてきたように思うのに、それをどこにどう記述していいのか、わからない。その際に忘れなかった風景が浮かんでくる。

忘れないことは難しい。

例えば、思春期に感じた「逃れられない柵」の中でどのように「生きのびる」か、ということ。今思えば、その「逃れられない柵」というのは、国家、時代性、家族、学校、制度……さらには生み落とされた得体の知れない不確かな『己』それそのものなのかもしれない。「今ここ」を見据えていたいという思いだけはいつも変わらない。

老師曰く「死ぬまで生きる。」

「生きる」ということは「死に向かう」ということ。

「いかに生きるか」という問題は「いかに死ぬか」ということである。

迷う度に支えになったのは、内山節の『自然と労働』においての以下の文であった。

「歴史や社会に対する人間の認識は、普遍的な真理に到達することはできない。人間が到達できるものは主体的真理にすぎない。なぜなら、認識する主体のあり方がつねに認識過程のなかに介入するというあたりまえのことから、誰も逃れることはできないからである。かつてマックス・ウェーバーが“価値判断から自由な学問”を提唱した時、それはイデオロギーに操作された主観的真理にすぎないものを、普遍的真理であるごとく主張する者たちへの批判としては正しかった。だがそれは、あらゆる価値判断から自由な純粋に学問的境地があるかのごとく錯覚したとき誤っていたのである。私たちに要請されているものは、主体のあり方と認識という行為が如何なる関係にあるのかをとらえる努力である。なぜなら、人間の主体そのものが歴史的制約から逃れられず、そうであるかぎり、私たちは純粋に普遍的な真理に到達することなどできないからである。」⁽¹⁾

右余曲折をくり返しながらか、ようやく「一枚の画用紙」に辿り着いた。しかし、未だにその画用紙とにらめっこ。

卒論を振り返る

卒論過程で、悶々とする中偶然の出会いが、ふたつあった。

「売薬さん」と「若者達」である。

卒論で「富山の薬売り」として親しまれている富山売薬行商人の軌跡について取り上げた。

この列島で幼少期を体験した一定年齢以上の人ならば「売薬さん」という響きに、赤い達磨の薬箱や薬袋そして紙風船の残像もしくは麝香の匂いを記憶されていることだろう。

それは、新聞記事との出会いが始まりであった。「くすり屋さん回商余話」と題されたシリーズの記事には薬日新聞の田邊勝氏が実際に売薬さんから聞かれた様々なエピソードが綴られていた。30年離れ離れになった兄弟の再会のきっかけになった売薬親子の話、列島の様々な地域を解消されている売薬さんは身をもってしきたりの違いを心得ているという話……

富山薬業史を紐解けば、富山売薬は藩の財政改革の収入源として藩の後ろ盾のもとに始まり、行商を行った最初は、寛永年間(1624-1643)肥後の国への行商である。そしてこの列島を九州地方から中国地方へ、そして東北地方へと販路を拡大していったらしい。今では、沖縄を除く列島全域に渡っている。「先用後利」の売薬は永代商法であり、お得意さんとの関係性のつながりの中で生きる商いである。私の関心は専ら売買行為を越えて売薬さんがお得意先や地域と紡いでいった関係性であった。売薬さんなら時代性の移りかわりをマクロな

視点で見届けていったにちがいないと思ったからである。

そして、実際に自分が現在の売薬さんに会ってみたくなったのだ。富山の小杉町という地域の役場に連絡し、小杉の売薬さんとコンタクトを取ることができ、小杉町薬業連合会会長の高知勇二氏を始め、薬日新聞の田邊勝氏にもお会いすることができた。

以下は座談会における私の自己紹介である。(座談会 2002 年年 11 月 3 日 小杉福祉会館にて)

「今日は皆様お忙しいなか、本当に申しわけありませんでした。有難うございます。京都大学教育学部に所属しています渦原です。学生といいましても、編入生として入りました。高校で英語の講師をしながら大学の方に関わっています。

私が売薬さんと出会ったのは、一つの新聞記事でした。薬日新聞の田邊さんがお書きになった記事でした。

それから売薬さんが江戸時代からあったことを知り、大きな史料集とか色々な文献があるのですが、そういうものに眼を通していくうちに、私の視点がどこなのかと考えていくうちに、自分が日々考えていることと(売薬さんを通して私が見ているもの)とやはり根っこが繋がっていて、そのことを考えていると「自分の視点」が何時代の売薬さんというのではなしに、江戸時代にも売薬さんはいて、個人でやられていたということ、それと今の時代の問題点というか、学校教育の疑問点、自分の「こだわり」みたいなものが、田邊さんの記事を読んだ時にひっかかったのです。

売薬さんと顧客(お得意さん)との関係性のなかにあるものを根っこにおいて卒論を書きたいなあ、と思っています。

それでいつの間にか、今、売薬業に従事されている方、もしくは長い間従事されていた方のお話をききたいなあ、と思うようになりました。それで町役場の方にアクセスさせて頂いたわけです。

それじゃあ、「何故小杉なのか」といわれると私もよくわからないのですが、小杉という地名が頭の中に残っていたのです。

返答がすぐ来たのは町役場の方が商工会の方に連絡してくださって、そして中沖さん、河内さんに伝わっていったわけなんです。そしてこのような場を設けてくださることになりました。わたしはすごく感謝しています。どうもありがとうございました。

(略)

時代には時代の色があると思うのです。明治には明治の「いろ」大正には大正の「いろ」、

昭和には昭和の「いろ」があると思うのです。そして平成には平成の「いろ」があると思うのです。

私は1970年代に生まれました。私は祖父と一緒に暮らしているのですが、祖父には祖父の時代の色があり、母には母の時代の色があって……私の側から祖父と母を比較できるという位置にいるから見えるものであります。そうすると、「じゃあ私の時代の色ってどういうものなのかなあ……」と思った時に「果たして色があるのだろうか」、そのように自分が中(その時代の)にいて思うときがあるのです。

売薬に従事されている方はやっぱり、1日1日変わっていくのですが小さな色の変遷っていうものは分からないのですが、一つの区切り方というか変わり方を見ておられると思ったのです。その、ちょっと色が変わってきたかなあ、って思うことを、どんなことでもいいのですがお得意先との関係の中でもその地域の風景のことでもいいのです。もしお話していたければ幸いです。」

このとき私はベテランの売薬さんを前にギリギリの拙い言葉でしどろもどろ、していた。「色(いろ)」と喩えたが、でも一体「色(いろ)」ってなんなんだ。自己紹介するたびにその場から逃げ出したくなる。「お前は何をしにここに来たのだ」と問いなおされる。そのたびに「お前はここに何をしに来たのか」と問いなおす。「いま、ここ」が知りたいんです、という訳にはいかなかった。

これは、私の偏見であるが、祖父母の話や団塊の世代族の親たちが語る話にはデコボコした感覚があるように思う。多分それは、1980年代の「バブル時代」の空虚さの感覚を思春期に身につけてしまったという強烈な自覚があるからかもしれない。

そんなことを思いながら結局私は何を聞きに来たのだ? 聞きたいことがわからないのに来てしまった自分を恥じる。

さて座談会は以下のように続いた。

「先ほどわかりやすく何時代何時代を色で喩えられたわね。江戸時代は江戸時代。おじいちゃんはおじいちゃんの時代と。一番の交流その時はどんなことかと言うと、富山の売薬さんは北海道から昆布。その中でまあ、私は北海道の方はあんまり詳しくないんですけどいろいろの話をきいたんですが、獅子舞踊りとかがやっぱり今もなされだんだん時代が変わるに従って私は北海道に行っていないんですけど、深い交流があった。

昔から大変大きく変わっておるんですね。それも大きく変わり方もものすごい変わり方なんです。昔の、まあ、明治大正昭和我々の業者が一軒一軒回っていかん早く情報を提供するか、また健康状態の話をメインディッシュにねえ……まあそれは、今も続いておと思うのですがその頃の時代はもっとも信頼も強く、食事するところを決めて……その頃まだ一人一人の人がかごのような弁当を持って食べる若い時に弁当おいてきたことによって喜んでくれた。一つの例です。皆さん経験あると思いますよ。一緒に食べるおじいちゃんおばあちゃんが……やっぱり弁当とそして、子どもさんがよろこんでくれたこれは一つの例でした。」

「私のお客さんの一人で佐賀県の人なんですがチューリップの球根をね、全体の方に特に世話になったお客さん。お得意さんでも色々……2万3万なんそういうお宅には出しませんけれども何軒か球根ね、あの花ちゃ。向こうから金額にして10万円ぐらい買っておる。そこに今でも増えていきますからねチューリップは……大変奇麗。これは富山の葉ちょっと今の時代としました自慢になるようなものを現在でも御座います。チューリップの種お客さんとコミュニケーション話題になるわね。岐阜県へお客さんがすきだから富山県のチューリップ喜ばれるし、ただお客さんとのコミュニケーションだわね。」

色々な売薬さんが昔を語られた。けれどもわたしは緊張と、富山のことばになれず、ただ本当にボーッと聞くだけであった。

そして話はいつしか、今の売薬状況についての不満へと導かれていった。サラリー的な企業形態をとる今日、一人で廻商するということがもう廃れてきた時代について。売薬さんは口々に売薬精神について話し始めたのである。

一人の売薬さんが、叫ぶように大声で言った。

「おねえちゃん、教育ということをするなら、なんとかならんちゃ。廻商しても老人の話相手じゃ、世代のつながりがあってこそ意味があった商売いちゃ」

一番きつい言葉だった。

「なんとかならんちゃ……」。その声の勢いには売薬さんという人生を生き抜いたひとりの生き様が凝縮されていた。その声に対峙して耳を傾けるだけの器量のない自分を思い知らされる。「きょういく」って何だろう。

若者達との出会い

母校の中高で英語の講師として働いていた。

高校2年生の教室。その日、教室に入った瞬間「何かが違う」というようなどんよりとした雰囲気を感じた。

「皆どうしたの？ 今日は灰色系なかんじやん？」

「わからへんねん！ なにもかもが」アヤカが言った。尋ねると、進路相談で悩んでいるという。口々に先生や親のことを言う。「なんもわかってへんもん。親も先生も」

今日は英語の授業にはならないなあ……と感じた私は皆に言いたい放題させることにした。親のこと担任のこと生徒達は口々に言い出した。

次の日に、私が高校生生の16歳の時書いた日記を読んだ。私が何を考えていたかということ。

「どうして私は『ゆい』なんだろう。昔から変った名前だねっていわれる。でも、私の母親が名づけたからそうなんです。大人ってよくわかんない。色んな先生が言う。『お前は将来なにをしたいのか』って。そんなんわからない。あなたたちに分かってもらいたくないもん。あなたたちにとって私の進路は何月何日までに生徒の進路調査を提出しなければならないからしているおしごとなんですよ。あなたたちは私たちをエサにしてるんですよ。それで生活してるんですよ。あなたたちはどうしてそんなに全部分かったように私を見下した目で見るの？ 『そんなことも分かんのか』って言っても、『うん。そんなこともわからへんです』それでもいいじゃない。私のことは私が決めるもん。生まれたことは神様みたいななにかが私に命という形であたえたこと。私はそれをもらっちゃっただけやもん。」

読み終えた私はみんなの顔を見ながら、「なんかさあ、わたしも皆と同じこと考えてたなあ、っておもうな。つらいなあ。このときこれを書いたときの「わたし」と「みんな」を通して再び出会っているような感じがするよ。あの頃私は本当にこの世界の意味が分からなくてなんか漠然としてもう苦しくてしょうがなかった。かといって、今もあんまりかわらないのだけだね。」

ただ日記を読んでいて一つだけ思わずその場で差し込んでしまった言葉がある。「それでもいいじゃない」という言葉だった。42人を前に私は思わず誰かから要請されたように言ってしまった。

それ以降時々、若者達から手紙や電話、ファックスが届くようになった。

その年の高校2年生のあるクラスでは、折に触れて『カギカッコ』の授業を行った。私は

たとえ話のように自分が今までに出会った人々のことや風景を若者達に語った。もちろん全員が全員そんな話を聞いたかったわけではなかろうが。

若者達にとって講師も専任も区別はない。若者からの発言に思わず「聴いてしまう」ことの内容が重いこともある。「講師」という立ち位置は、学校という閉ざされた空間の中の風通し的な存在ともいえよう。あらゆる面において完全な責任を持つことが出来ないのも、若者達との関係性において、どこまで立ち入っていいのかわからない。ある一人の告白を担任に告げるべきなのか否かなど、個人的選択を強いられることが非常に多いように実感する。保健室は定員オーバー、カウンセラータイムは予約待ちの今日この頃。若者達にとって、講師だから言えることもあるのだろう。講師というのは不思議な存在である。学校という組織・制度に「属していないのに属している」のだ。属しているというのは、若者達と「立ち会っている」ということにおいて。

「立ち会う」ということ

皆去って行く。それでいい。忘れればいいのだ。忘れるほどの「これから」の風景と出会えばそれでいい。悲しいけど、日常は忘れて行く。「忘れない」ということは難しい。でも、忘れることのできない人もいる。あの時の落し物を懷に抱きしめ続けなければ生きていけない人もいる。皆のおかげで丁寧に高校時代の日記を読む機会を与えられた。あのころの私が別人のようにも思えるし、今向き合っている若者の一人のようにも思えた。「今ここを見据えたい」という欲求は確かにあの時一生懸命に考えていた自分のことと繋がっている。

大人になって高校時代に考えていたことを今も考えているというと、人々は言う。「お前は若いなあ」って。そのたびに、ちょっぴり寂しくなって思う。「うん。そや若いで。でも、あの10代に必死で沢山のことを考えたことを忘れたくないねん。」

卒論で、私は売薬を世間師として捉えた。以下卒論からの記述を抜粋する。

世間師とは、柳田国男によれば、「セケン（世間）は外来語であり、且つ又讀書語でもあるが、それでも必要があると我々は之を採用した。セケンシといふ語などは前者を編入してから後に、我々の手で拵へた新語のやうに思ふ」⁽²⁾そして、さらに「セケンシは辞書には皆輕蔑の感を伴ふもののやうに解して居るが、それは又一段の変遷であらうと思ふ。少なくとも私などは、やや羨みの感じを以ってこの一語を習ひ取つた。村の人たちの知らぬことを

知って居る者、旅行が好きで異郷の見聞に富む人といふのが、その最初の意味であつたらしい」⁽³⁾

世間はもともとサンスクリット loka (場所・領域) の漢訳語である。柳田の文意に従うならば、世間師はその用語が「我々」(とは民俗伝承の会に参加している者のことかと伺われる) によって掬えられたのである。

専ら私は民俗学者として知られる宮本常一の著作に出てくる世間師を富山の売薬と重ねた。

「私の親戚の先祖にやはりある日突然に村から消えたのがいた。そして何年というほど戻って来なかった。

この人は旅からかえって三十年も生き、九十すぎに死んだ。村人はこの人を世間師とよんだ。広い世間のことを実によく知っていたばかりでなく、いろいろの人生相談にのってくれた。広い世間で得た知識は村人のためにずいぶん役立った。

(略)

村の中にある知識や技術には限界があった。そしてそれだけでは問題を解決することのできない場合が少なくなかった。世間を見てくることもそうした村の問題をとくことの方便として必要なことであった……」⁽⁴⁾

これは一度、郷里の村を出て、世間を広く見てきたものが、村に帰った後、その村の内だけでは解決できない事柄を「とくことの方便」になったと言うはなしである。郷里から出て行って帰ったものを、世間師として記述している。内にいたものが外へ出て内へもどる。その外に出た、つまり、世間で見たり体験したりしたことが、帰郷後、故郷の共同体内だけでは解決できない物事の「とく方便」となったという。

売薬さんは、得意先の共同体に属してはいないが、体験知として方々の習俗の知恵を身につけている。その知恵が訪れた得意先にとって「なか」にいては解決不能なことについて解決する契機になっている。しかし、あくまでも売薬さんは得意先の内に関わりながらも外存在である。相手の土を共に踏みながら考え、帰っていく人である。世間師は、もとの土地に戻り、様々な異質な風を誘い込んだ。売薬さんは、定期的に外の風を持ち込みつつ、その土地の人と関わっていった。

その売薬さんが地域にもたらしたものが今も語り継がれている。例えば……富山犂、田植え定木、レンゲ、種粃、背負子……

また、私は宮本自身の生き方を追うようになった。

赤坂憲雄の『民俗誌を織る旅』の中の記述に従えば、宮本という男は「この列島の村や町

を舐める如く」歩き「旅行した日数4,000日、通過した村や町は3,000、足を留めて話を聞いた箇所は800、留めてもらった民家は1,000軒」という。「大島の百姓」を自称しつつ歩き続けた宮本は、その風貌からよく、富山の薬売り間違えられたらしい。宮本の著『忘れられた日本人』にはその描写が描かれている

「よう、あんた宮本さんか。わしゃまた富山の薬屋かと思った。富山にしては今までにきたことのない男だと思って……」⁽⁵⁾ そのときの彼はよくこのような格好であったといわれているような姿であったのだろうか。ジャンパー、コールテンのズボンに、ゲートルそして、ズックの靴を履き、よごれたリュックサックを背負いコウモリ傘をリュックサックの負い革にさげて……一方売薬さんは柳行李を黒の大風呂敷で包み、背に負うて歩き、身なりは質素で堅実であった。明治になると、片手に「コウモリ傘」を持って歩いたらしい。

小国善弘は『民俗学と学校教育』の中で、宮本を「世間師」としての教師として、とりあげている。彼は「旅」をメタファーとした宮本の教育実践において教師の役割を子供の多様な旅を意味付け、方向づける「世間師（しょけんし）」として再定義されていたと捉える。そして先にあげた「旅の遺産」の例をあげ、宮本自身が、「世間師」として生き、民俗調査の過程で土地の人々と交わり地域振興のために親身になって相談にのったことを指摘する。

「大阪府泉北郡池田小学校の教師宮本常一の教育実践は、子供達が生まれた在所の外にて他の村や集落の民俗を見学し調査するという、いわば小さな旅を試みていた。宮本の組織した授業実践では、子供が自らの存在を単一の共同体に帰属するという人間と見なすのだけでなく、越境的な旅人と捉える可能性を含んでいた。」⁽⁶⁾

また、彼は「忘れられた問い」として以下のように述べる。

「1930年代において民間伝承の会の会員教師たちが学校教育に提起した問いは、日常生活における『教育現象』の存在を踏まえたとき、学校教育をどのように再構築するべきなのか、またはなし得るのかという民俗学を学んだ教師たちが自らの職務につきつけた素朴な疑問であった。子供達が実に多様な民俗文化の複雑な絡み合いの中に生きていること、その中で既に「伝承」という一種の教育行為を日々受けていること、それらの事実に気付いた時教師たちは、制度としての学校教育に非信任状をつきつけざるを得なかった。彼らは、子どもたちが文化的な空白状態、無教育の状態において教室に来ているかのように見なす従来の学校教育の暗黙の前提が誤りであることに具体的に気付くことになったからである。」⁽⁷⁾

「内から見る」ということ

村という共同体にぼっかりできた場。子供と向き合った時の宮本は同じ土の上を踏んでいたのであろう。教師として生きる宮本と通底してそのような断絶の中で『生きる』という視点において宮本は子供と同じ目であったに違いない。私はそれを「内から見る」という表現で記述した。宮本が子供を通して己の生き方と対話しているように見えたからである。

彼は、『家郷の訓』の序文でこう述べる。

「私が特に村里生活内における躰のことについてのべて見たかったのは、かつて私が初等教育界にあって、教育者として多くの悩みを持っていたことに一つの動機がある。十七歳にして百姓生活を打ち切って大阪へ出、二〇歳をすぎて小学校の訓導となり、泉の農村で十余年を過ごした。その間たえず教育の効果を十分にあげ得ないことに苦悩した。そしてその原因の一半はその村における生活習慣や家庭の事情に暗いことにあるのを知った。子どもの性癖や嗜好すなわち個性といわれるものは先天的なものもあるけれども、その村の性格や家風によるもの、言いかえればいえ及び村の生活の反映によるものもまた多いのである。そして郷党の希求するところや躰の状況が本当に分らないと、学校の教育と家郷の躰の間にともすれば喰違いを生じ、それが教育効果を著しく削いでいることを知ったのである。民俗学という学問を、趣味としてでなく痛切な必要感から学びはじめた動機はこの苦悩の解決にあったのだが、いつかその学問を教壇の上に生かすことはしなくて、教壇はすてて学問に専心するようになってしまった。」⁽⁸⁾

学校という村の中にできた更なる空間において、子供と向き合う宮本。「子供の内から見る」ということは子供の生きている世界、つまり村という世界を見る。その世界に根ざしながら生きる子供と、その村の中にできた学校という空間で訓導しなければならない「自分を見る」。その中で、相手の立場になって考えるということは相手の側に立つということではなく、相手の側に立ちながら自らの位置を確認するということでもある。相手との間にはささやかな距離が無ければならない。奇しくもそれは宮本にとって村の慣習の世界にあらわれた「学校」という近代的な教育機関側として生徒と向かい合っている己の姿ではなかったか。宮本の当時の位置。村という枠の中にできた更なる学校という枠の中にいた宮本。村で生きる子供たちと、その学校の中で接する両者。その中にいて子供と向き合う。二重の壁を見ていたと言うことであろう。宮本は寄り添うように子供達を通して考えたのであろう。相手の側、つまり「内から」見ようとするには、ささやかな距離が無ければ相手の「内」に到達することはできない。相手の場に入って「内を見る」ということはできないのである。「相手」

に寄り添いつつ、自らの「問い」に変換する。その「寄り添う」距離の中で、生成されるものが自らの「問い」になり、相手とむきあうことで相手の文化を自発的に生かすのではないだろうか。生きる知恵を生成させるのではなく、生活知恵が生成してしまうのである。

民俗学者や教師という衣を越えて相手に寄り添いつつ「世間師」として生き抜いた宮本の生きように共感し得た。

私は何か研究したい対象があったのではない。講師としての仕事も売薬さんと出会ったということもただの偶然にすぎない。ただ与えられた一つ一つの場を通して振り返ってみると自分のその場との関わりが常に螺旋を巻くようなのでその過程をひとまずここで「対話」と名付けたい。これからもそのような指向性は変わらないと思う。

今回ダラダラと書き綴ったのは、もう一度卒論と対話することによって去年一年を、ひいては編入からの道取りを辿る作業であった。始まるための終わりであり、終わるための始まりである。目の前の一枚の画用紙に向き合うためにどうしても必要な作業であった。

✦注

- 1 内山節『自然と労働』、人間選書、1981年 220頁
- 2 柳田國男「廣島へ煙草買ひに」『定本 柳田國男第15巻』、筑摩書房、1963年、572頁
- 3 柳田國男「廣島へ煙草買ひに」『定本 柳田國男第15巻』、筑摩書房、1963年、572頁
- 4 宮本常一「旅の遺産」、宮本常一編著『旅の民俗と歴史3 旅の発見』、八坂書房、1987年、46-47
- 5 宮本常一『忘れられた日本人』、岩波書店、1984年、283-284頁
- 6 小国善弘『民俗学運動と学校教育』東京大学出版会、2001年
- 7 小国善弘『民俗学運動と学校教育』東京大学出版会、2001年
- 8 宮本常一「家郷の訓」『宮本常一著作集6』未来社 1967年、6頁

✦参考文献

- 『平凡社 大百科事典 18』平凡社、1985年、553-554頁
 赤坂憲雄「宮本常一、または世間師という場所」『民俗誌を織る旅』、五柳書院、2002年、111-122頁

(うずはらゆい 京都大学大学院教育学研究科修士課程)